

## 仏教的宇宙観から見たスピリチュアリティ

山中 康裕 京都ヘルメス研究所長・京都大学名誉教授\*

Spirituality from a Buddhist cosmological perspective

YAMANAKA Yasuhiro

本日の講演は、いただいたものから、「仏教的宇宙観から見たスピリチュアリティ」というタイトルに替えました。仏教に関しては10年ほど前に西本願寺塔頭・一行寺で話した内容をベースに、パリ郊外のベレバ (Beresba) の国際華嚴経学会で話した内容を盛り込んで、この学会用にアレンジしたものとなります。

### 原始仏教

仏教その他については先ほどの前田正先生の話と若干重なる部分もあると思いますが、私なりの特徴を出して話したいと思います。

パーリ語で書かれた原始仏教に、「三蔵」と呼ばれるものがあります。三蔵とは経蔵・律蔵・論蔵です。ところで、サンスクリット語は実はインドの雅語でバラモンの言語です。但しこれは話される言語ではなくて、書かれる言語です。何故かと言えば、インド大陸は広く、ドラヴィダ族だけでも60以上の部族があり、各々独自の言語を喋っていて共通語が必要になるからなのです。よって文法には一切の例外なく言ってみれば「完全なる言語」ですが、全く話されていません。ところで、三蔵はこのサンスクリット語ではなく南方仏教聖典用語であるパーリ語、いわば方言で書かれています。しか

もこれは話されている言語です。中村元先生<sup>はじめ</sup>の著書にもそうはっきりとあります。

(画像を示しながら) この肖像がシャークヤムニ、中国語・日本語では釈迦牟尼と表記される仏陀 (बुद्ध, ブッダ)・釈尊です。後に釈迦牟尼仏とも呼ばれるようになりましたが、この仏は実在、つまりこの世に実際に生きた人です。紀元前565年から同486年まで存命したことがはっきりしています。今からちょうど2500年ほど前の方です。本名ゴータマ・シッダールタ (गौतम सदिधार्थ)、もともとは釈迦族の王子だったのですが、妃ヤショーダラー (Yasodharā) と結婚してラーフラ (Rāhula) という子どもが産まれた後、林に入って修行を始められました。

さて、経蔵にはディーガ・ニカーヤ、マッジマ・ニカーヤ、サンユッタ・ニカーヤ、アングッタラ・ニカーヤ、クッダカ・ニカーヤの五つがありますが、本講演では話の中心ではないので省きます。(画像を示しながら) これがパーリ語で書かれた現物の経典です。ヤシの葉に書かれています。私はパーリ語は読めませんがサンスクリット語は読めます。なぜなら医学研究科・大学院生の時に名古屋大学の仏教哲学の大学院に通うところを、上田義文教授が定年で辞めてしまわれたため、その院生に頼んで家庭教師に来て貰い学んだからです。それはある事情、つまり私の精神医学・仏教学の恩師・岸本鎌一先生の「浄土経典の文末に書かれてい

\* iranshi39@ares.eonet.ne.jp  
京都ヘルメス研究所  
〒611-0021 京都府宇治市宇治字 27-2 クレセント宇治 408

る、〈ただし、<sup>ごぎやくいっせんだい</sup>五逆一闡提を除く〉の言葉が、何処から入り込んだのかを原典で調べよ」とのお達しがあったからでした。法相宗の起源辺りにアタリを付けて読んでいったのですが、やはりそうでした。

(画像を示しながら) これは『ダンマパダ (Dhammapada)』です。先ほど前田先生の話にも出てきました。日本語では『法句経』と訳されているパーリ語聖典です。基本的には「人は如何に生きるべきか」について書かれています。「何事も心の持ち方による。恨みにとらわれるな。争いはやめよ。勤めに励め。心を収めよ。怒りを捨てよ。真理の言葉を摘み集めよ。善行を常に。愚者は真理を知ることがない。真人になれ。充実した生活を。悪を避けよ。暴力を避けよ。自分を見つめよ。老いと死は避けられぬものだ」など、どれをとってもごく当たり前のことが書かれています。実はとても大事なことばかりです。これは日本語にも訳されていて、岩波文庫できちんと読むことができます。

(画像を示しながら) これは、サンスクリット語経典『ウダーナヴァルガ (Udānavarga, Tib. འུ་དཱ་ནཱ་འུ་དཱ་འུ་དཱ་འུ་དཱ་, <sup>ほうしゅうようじゆきょう</sup>法集要頌經)』です。「仏陀の感興の言葉」とされているものです。仏教の実践の根本は「他者への思いやり」です。日本語では「慈悲」という言葉で訳されることが多いです。「なぜ他者を傷つけてはいけないのか」、本経はそれを以下のように説いています。「どの方向に心で探し求めても、自分よりさらに愛しいものをどこにも見いだすことができなかつた。このように、他者にとって、それぞれに自分が愛しいのである。故に、自分のために他者を害してはならない」と。

(画像を示しながら) これはサンスクリット語経典『マハー・パリニツヴァーナ・スートラ (महापरनिर्वाणसूत्र, Mahāparinirvāṇa Sūtra)』です。日本語では『<sup>だいほつねはんぎょう</sup>大般涅槃經』と呼ばれて

いて、釈尊の最後の旅について記されています。靈鷲山は須弥山などといわれることもあります。聖山シユメールのことです。釈尊はこの山から故郷に向かって徒歩で旅に出られました。80歳のときです。私は3日前、ちょうど80歳・傘寿になったばかりです。インドの王たる阿闍世が阿難陀に伺いを立てました。阿難陀とはインド語から中国語に音写された修行者の名で、阿難とも言います。さて、王はその阿難に確かめます。「理想的な政治形態とはどのようなものか、宗教者の尊厳とは何か、共同体法整備の一致協力、戦争の中止について」など、もう既にこのときから言われています。そして遊女のアンバパーリーに約束をきちんと守ろうと、招待を受けます。遊女といっても現在用いられている意味とは異なります。彼女は釈尊の教えを受け園林を寄進しました。

(図像を示しながら) このお姿は人間・釈尊の姿です。禪定とは悟りの境地です。「私には秘密の教えは何もない」と否定します。親鸞も同じことを言っていますね。息子善鸞が「自分は秘教を受けている」と嘘を言ったものですから、80歳にして親鸞は息子を義絶している。あの高齢(当時と今とでは、栄養事情も医療・衛生事情も全く違うので、同じ歳でも全く異なることをこそ考えるべきです)でも凄い苦悩を自ら選び取ったわけで、甘くはない。

仏陀自身に戻ります。「人間は誰でも老いるもの。自らに頼るな。自分は教団の指導者などではない」と。今では仏陀・シャークヤムニを仏教教団の教主と祭り上げている人がありますが、本人自身はそうは言っていません。さて、彼はここで自分に死が近づきつつあることを悟りました。「人間の命は、しかし甘いものだ」といい、鍛冶師チュンダの供養をし病に悩みます。そして旅に疲れます。ヒラニヤヴァティー河を渡って一生を回顧し、クシナガラで入滅、つまりお亡くなりになりました。これが釈尊の

人間としての最期です。

ダルマ (धर्म, Dharma) はサンスクリット語で、パーリ語のダンマ (Damma) は「法」とか「道」などと訳される言葉です。普通の言葉で言うと道理とかことわりです。水と麿 (ロク)。ロクとは神獣、シカとライオンを足したような想像上の神的動物です。人間の行うべき規範、哲学・宗教・倫理はその当時は同じもので、それは教えでありことわりでした。倫理的な意義、ダルマによる支配を世の中は全て人間も含めて受けているのです。実にダルマは「水」です。「故に地上に雨が降るときは、全世界は違<sup>したが</sup>う。けれども雨が降らないときは、強者は弱者の物を略奪することがある、何となれば法は水だから」と書かれています。

(画像を示しながら) 水の惑星。これはつい最近、といってももう10年ほど前でしょうか。日本が打ち上げた人工衛星かぐやから撮った写真です。私はこの写真が大好きで、これはテレビから撮りました。まさに青く美しい「水の惑星」ですね。人類で初めて客観的に地球を見た宇宙飛行士ガガーリンは言いました「地球は青かった」と。

## 仏教世界を宇宙観で見る

仏教世界を宇宙観で見るとします。ダルマを司る神をヴァルナ (वरुण, Varuṇa) といいます。ミトラ (मतिर, mitra) と並ぶインドの最高神です。これはギリシャ神話のウーラノス (Οὐρανός, Ouranos) に等しい神ではないか。ヴァルナは天空神、水と天の神様で、厳粛で峻烈な司法神でもあり畏敬の対象です。後に死後の裁きの神ヤマと融合しました。ヤマはサンスクリット語 यम (Yama) で、日本では閻魔大王と呼ばれています。天空から常に見ています。そして裁きます。ダルマは真理であり絶対者です。

## 空観

シューニャ/シュニヤッタ (शून्यता, 「空」) は非常に風変わりなコトバです。シュウは、「膨張する、広がる」という意味で、「それを欠く」ことです。つまり固定的実体のないこと、空虚・欠如・中空、数学ではゼロのことです。釈迦はあらゆる存在の関係を「縁起」で説きました。

## 縁起

縁起 (प्रतीत्यसमुत्पाद, pratītya-samutpāda) は仏教の根本教理・基本教説の1つであり、釈迦の「悟りの内容」を表明するものとされます。因縁生・縁起法・縁生・因縁法・此縁性なども訳される言葉ですが、ここでは深入りはせずそのままの言葉として扱いますが、よく誤解されるのであえて言い添えておくと、仏教の縁起論は因果論に対立するものというよりは通常いう因果論をも含んだもっと広範な概念です。

(画像を示しながら) この像は龍樹 (नागार्जुन, Nāgārjuna, ナーガールジュナ) です。先ほどの前田先生の話にも出てきました。龍樹はインドの王でもあり非常に優れた人です。仏陀以後で最も優れている方だと思います。彼は「あらゆる存在・運動・機能・要素なども含めて、それらの〈関係性〉において、これらが成立していること」を説きました。しかも「それらは相互矛盾しているものを沢山孕んでいて、依存し合うこと」を論じ、全てを含めて空としました。そしてこれを『中論』という書物したたに認めました。だから日本語でもレグルス文庫などで読むことができます。2世紀から3世紀にかけての实在の人です。

『般若心経』(正式には『魔訶波羅蜜多心経』) 日本でも相当よく読まれていて、最も有

名な経の一つです。原名は『プラジュニヤパーラミター・フリダヤ (प्रज्ञापारमिताहृदय, Prajñāpāramitāhṛdaya)』です。鳩摩羅什が訳したものが『大品・般若経』、玄奘三蔵が訳したものが『小品・般若』と呼ばれています。全部で7種類の訳があります。私は鳩摩羅什の訳を愛用しています。

色即是空。空即是色 (rūpaṃ śūnyatā, śūnyatāiva rūpaṃ)。これは、「存在するものは全て空である。空は、すなわち存在のことである」という意味です。鳩摩羅什 (कुमारजीव, Kumārajīva, クマラージューヴァ) は4世紀のインド僧、玄奘三蔵は7世紀の中国僧です。

現代の空観。この私が言うのではなくて、『華嚴経』や『般若心経』に端的に表現された、この龍樹の洞察こそ、現代科学の到達点だと考えています。

現代科学はどこに到達しているかという、巨大宇宙とナノ宇宙の統合された世界です。宇宙空間は今まだ広がりつつありますが、巨大宇宙とは41億光年 (1光年つまり約9兆5000億km、数字で表現すると $9.5 \times 10^{15}$ 乗m) の広がり、巨大空間のちょうど一番端っこです。ナノ宇宙とはつまり1nm (ナノメートル) が1ミクロンの10分の1ですから、10のマイナス5乗mの微小空間です。つまり宇宙はこれら10の15乗と5乗を統合した範囲、つまり10の20乗mの範囲にある世界ですね。数であらわすとごく簡単にその規模が分かる。

但し、よく間違われますが、例えばさきほどの前田先生の話にもあった前世紀最後の方に明らかになったと言う「ヒトのゲノム配列」もただその「順序が明らかになった」に過ぎず、これらの一つ一つの「関係性」に関しては何一つ明らかにはなっていません。

『科捜研の女』の沢口靖子<sup>もたら</sup>の名セリフ「科学は正しい判断を齎す」というけれど、そうした細かい一つ一つの関係性が何も明らかにされて

いない以上、実は何も分かったことにはならないのです。科学の世界で「エヴィデンス」というけれど、実は科学で本当のエヴィデンスを提示することはたやすいことではありません。TVで今、自信ありげに喋っている脳科学者の中野信子は実は何のエヴィデンスも根拠もないことを滔々と言っていますが、騙されてはいけません。政治家が言うことは何のエヴィデンスも根拠もないことは誰にも分かっていますが、科学者の嘘は許せません。

2500年前にソクラテスが言ったように、「私は何も知らないことを知っている」というよりほかなく、実はほとんど詳しいことは何も分かってはいません。だから例えば、人の精神病に関しても「ドーパミンの異常」といったって、どういう量のどういう状態におけるどういう反応が起きた時の状態像なのかは何一つ明らかではありません。だから、とくに精神医学や脳科学の科学性は実に信用ならないのです。

さて、驚くべきことにこの微小空間から巨大宇宙に至る「世界観」は既に釈尊において言及されているのです。釈尊亡き後、56億7000万年あとに、弥勒仏 (maitreya) が出現するとのことですが、こういう表記も $5.67 \times 10^9$ 乗年後ということで、ちっとも不自然ではありません。

私は、この二大先哲、釈迦牟尼と龍樹は、この現代の宇宙観を先取りしていたと考えています。

仏教經典にはさまざまなものがあります。まず經典として最初に現れるのは「小乗 (हीनयान, Hīnayāna) 經典」です。これはミャンマー・タイ・カンボジア・ラオスなど東南アジアに伝わっていて、信者たちは茶色やオレンジ色布の長衣を着ています。これは釈迦直説・直伝の原始仏典といわれています。日本では『阿含経』が伝わっています。ただ、この「小乗」という言い方は「大乘仏教」が盛んになっていくにつれて大乘側から言い出された蔑

称で、正しい言い方ではありません。「上座部」とか「部派仏教」とかの呼び方があります。なお、ここでは全く関係ありませんが、「邪馬台国」や「卑弥呼」、「倭国」という呼び方も当時の中国からの蔑称で、何故未だに歴史学者すらこの蔑称を用いているのか私は解しかねるのです。正しく「大和国」「日御子」「和国」などすべきなのに。中国式には、『魏志倭人伝』など歴史書に載っていることが正しいとする態度ですが、私の考えでは歴史書は為政者・権力者の側からの書き換えがあり必ずしも真実とは程遠い、という認識をこそ持つべきなのです。

さて、いわゆる「大乘 (महायान, Mahāyāna) 経典」には『般若心経』や『華嚴経』、『法華経』、『浄土三部経』など、1000巻以上もの経典があります。これらは信者に釈迦の教えを説いたもので、釈迦後の人たち仏弟子たちがいろいろと書いたものです。

また、「密教経典」は主に空海によって日本に齎もたらされたものです。実は『大日経』と『金剛頂経』ですが、これらも「大乘経典」の一つなのです。総じていえば、密教は他の用語としては金剛乘 (vajrayāna, ヴァジュラヤーナ)、真言乘 (mantrayāna, マントラヤーナ) などとも称されることがあります

## 『阿含経』

仏説『阿含経 (आगम, āgama)』は先ほど言った「小乗経典」の一つで、日本語でも読むことができます。これは最も古い仏教経典で、初期仏教の姿を残しています。阿含とはサンスクリット語やパーリ語のアーガマの音写で、「伝えられた教説、その集成」という意味です。ただ、現今の研究では漢訳本は必ずしもパーリ語からのものとは言えぬ書き足しがあったりして信用が置けないとも言われています。

(画像を見せながら) これは11年ほど前にスライドを作ったときに撮ったものです。例えば『浄土三部経』を取り上げますと、『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』の三つを『浄土三部経』といいます。『無量寿経』は大きいので『大経』、『観無量寿経』は『観経』、『阿弥陀経』は短いので『小経』と呼んでいます。大・小無量寿経はサンスクリットの原典がありますが、『観経』には見当たりません。というより私はもともと中国で作成された経典だと思います。ウイグル語訳というのがありますが、これは明らかに中国語からの訳でパーリ語からのものではありません。

## 七高僧

ここに、七高僧と書きました。簡単に言うと親鸞が「正信偈」にまとめた7人の高僧たちの名前です。龍樹りゅうじゆ (nāgārjuna, ナーガールジュナ) は2世紀に生まれたインドの僧です。先ほど言ったように、「空」や「中論」を説いた重要な人です。世親せしん (Vasubandhu, ヴァスバンドウ) は古代インド仏教瑜伽行唯識学派の僧です。天親とも呼ばれました。5世紀の人で、釈迦寂滅から1000年後になります。曇鸞とうらん (Tánluán) は中国南北朝時代の僧です。中国浄土教の開祖です。道綽どうしゃく (dào-chuò) は唐代の中国浄土教の僧侶です。善導ぜんどう (shàn-dǎo) は同じく中国浄土教の僧で、「称名念仏」を中心とする浄土思想を確立した人です。この3人は中国僧です。曇鸞の話は梁の皇帝も聴いたと書かれています。道綽は聖道門と浄土門を分けて考え、善導は『観経』を正しく理解した人物として日本に伝わっています。

そして、日本の僧である源信と源空です。源信は恵心僧都と称され、法然や親鸞より100年ほど前に日本で初めて浄土教を説きました。宇

治の平等院の対岸から眺めると、平等院がまるで西方浄土かと思われるような位置関係にあり、頼道が平等院を作ったのは源信の立った位置に身を置いて浄土を夢見たのではないかと思うくらいです。実は彼は『源氏物語』にも「横川の僧都」という名前で出てきており、とても有名なお坊さんでした。あの「宇治十条」の悲劇のお姫様の浮舟を助けたお坊さんです。源空は法然・源空と称した親鸞の先生です。源空の『選択本願念仏集』は現在も漢文で読むことができます。彼は13世紀に亡くなりました。

### 親鸞の『教行信証』

親鸞上人は12世紀から13世紀の人です。先ほど私の頭にぱっと出てこなかったのは、親鸞の『教行信証』です。正しくは『顕浄土真実教行文類』というのが正式名称の親鸞の主著です。これは現在も読むことができますが、このように厚く、500ページもの本になっていて6巻まであります。私は一応、全部読みました。浄土往生には念仏だけでよいという一言のために500ページもの本が書かれました。しかしいろいろ読んでいくと、この本の悪口を言う人がたくさんいます。後で現物を出しますが、どこがオリジナルか分からないくらい引用ばかりです。「99.9パーセントが引用で、著書といえるのか」と言う人がいますが、実は特に文科系の学問はすべて引用ばかりです。オリジナルの部分はほんの0.1パーセントくらいが相場であると知るべきです。私は今や80歳になり、学者生活を60年生きてきて、その事を断言できます。自分で見つかり自分が考えたりすることなんてほんの一握りだけです。むろんアインシュタインのように、それまでのほとんどの考えをひっくり返した大天才の論文は100パーセント彼のオリジナルですが。

ですから親鸞にオリジナリティーがないと

は全然思いません。師・法然に従ってひたすら「念仏だけでよい」との教えを示すのに、彼が比叡山で修行した20年の読書が全て生きていると言えます。凄いのは、この『教行信証』を読んでみますとそのページのあらゆる箇所に親鸞の加え書きが入っており、この文句はどこどこからとった、ここの教説の解釈は違っているのではないか、自分はこう読むなど、あらゆる書き込みがあります。全ての頁にわたってそうです。これを見ても親鸞の凄い勉強ぶりと彼独自の読みが浮かび上がってきます。宮沢賢治の『セロ弾きのゴーシュ』の原稿といい勝負です。これらに比して加え書きこそ少ないけれど、聖徳太子の『維摩経義疏』、『勝鬘経義疏』、『法華経義疏』の、いわゆる「三経義疏」はすでに漢籍や韓籍を読んで自分の意見を書き加えている、つまり6世紀に書かれた「日本最初の論文」と言ってもよく、とても感心します。

### 『正信偈』

それから、先ほどずっと名が出てこなかったのは『正信偈』つまり『正信念仏偈』です。これは、500ページの『教行信証』のエッセンスをまとめて韻文化し、わずか30頁ほどの104行、計728文字の短い文章にしたものです。私にとっては有名な鳩摩羅什訳『漢訳・般若心経』12文字、28行、計266文字に匹敵する名文句です。「阿弥陀仏のみ」を中心に、釈尊の教えを「依経段」といわれている部分と三国七高僧、これは「依釈段」といわれている部分ですが、この二つから成ります。前半は『無量寿経』に説かれた阿弥陀仏の本願を信じて念仏を唱えることがどれほど素晴らしいかを説いています。後半はこれを伝えてきた唐・天竺、つまりインド・中国と我が日本の高僧の功績をたたえた文章が続くわけです。

## 宇宙論・コスモロジー

宇宙論・コスモロジーという言葉が、特にここ30年ぐらいあちこちで使われるようになりました。コスモス (cosmos) はラテン語ですがギリシャ語でもあります。ギリシャ語のコスモス (κοσμος) の意味は「調和と秩序ある完結した世界」、これは一言で言えば「宇宙」です。これにロゴスを加えてコスモロジーとなります。ロジーとロゴスは同じもので「論」を意味します。ですから私は「宇宙論」と訳しています。「宇宙観」といってもいいと思います。「宇宙」は古代中国の言葉で、「宇」は時間、「宙」は空間です。今は普通に使われていますが、時間と空間の両方を内包した言葉で、実は古代中国で作られた言葉です。つまり、時空間が統合された世界を宇宙と呼んでいるわけです。ですからコスモロジーとは宇宙論、宇宙観のことです。

親鸞のコスモロジーについてもう少し話したいと思います。(画像を示しながら) これは親鸞の『いちねんたねんもんい一念多念文意』という非常に短い文章です。「如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大な利益をうるなり。自然に、さまざまのさとりを、すなわちひらく法則なり」とあります。今は自然を普通に「しぜん」と読むかと思いますが、この言葉は西洋から入ってきた「英語ネイチャー (nature)、ドイツ語ナトゥーア (Natur)、仏語ナチュール (nature)」の訳語です。往時日本語の「じねん」は、おのずからしかる、自然にそうになっていくという意味です。今では自然という言葉がごく無意識に使われていますが、往時日本語の「じねん」と西洋を経由した「自然」とは少し違います。

おおみねあきら大峯顕 (1929-2018) 先生はつい最近、亡くなられました。とても残念です。私がとても尊敬する仏教者の1人で、歌人でもあります。「親

鸞の念仏とは、如来の宇宙の法則に素直に従うこととして普遍的な真理に従う人間存在の道なのだ」と言っておられます。これは『親鸞のコスモロジー』(法蔵館、1990)で30年前に出た本から引用しました。この考えは実は「大乘経典」にもともとあったものですが、親鸞が更に明らかにしたといっているでしょう。

さて、曇鸞の功績は還相回向を説いたことです。還相回向は往相回向に対立する概念です。往相回向とは、この世に生きた人があの世に生まれかわることです。これに対して、還相回向とはあの世に行っただけでは駄目で、もう一回戻ってきて、この世の人たちに人間はこのように生きたほうがいいよと何らかの形で伝えることです。浄土教のコスモロジーはこの時点で大きく展開しました。「法性の都へ帰る」。これは法然上人門下の先輩にあたる聖覚法印の著された『ゆいしんしやう唯信鈔』について、その題号および引証された経釈の要文に親鸞が註釈を施されたものたる『唯信鈔文意』に見られる文章です。親鸞は世界の構造を一つの円環と考えました。ラテン語でキルクム・アンピュラチオ (circumambulatio) という言葉があります。円を成してぐるぐる回るといふあり方です。また「この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、ぐんじやうかい群生海の心なり」ともあります。この宇宙の微塵世界に如来はあまねく存在して、しかも一切群生海の核心だという意味です。一切群生海とは現代語でいえば世界のことです。ですから親鸞の宇宙や世界の捉え方は、明らかに現代の宇宙観や世界観と通底すると私は思います。

現時点での私の仏教理解は、仏陀は、先ほども言ったように実は現人、実際にこの世に生きて80歳で生涯を終えられた現存在仏です。彼は現在のネパール辺りのルンビニーで生まれ、20歳で出家しています。それまではカピラヴァストウのシュッドウダナ王の王子であり、妃マー

ヤー夫人の子として生まれますが、この母はすぐに亡くなり、母の妹のマハープラジャーパティに育てられました。妻のヤショーダラー妃との間にラーフラ王子という子どもが生まれましたが、これら美しい妻子を放り出して突然出家しました。普通から考えればとんでもないことです。彼は森へ行き、その後50年間ずっと悟りを求めて修行しました。「人はみな生・老・病・死という苦しみを味わわねばならないのか」。ここで、生・老の「生」は「生きる」ことというのではなく、「生まれる」ということです。「生まれたことによる悩み」です。35歳で悟りを開いたと言われていますが、彼はいわゆる荒行では無いがずっと修行しておられたとも考えられ、悟りへの途上の人とも言うことが出来ます。無論、通常の仏教上では釈迦牟尼は「如来」であって「菩薩」ではないので、この言い方は誤解を招きますが。

## 〈抽象仏〉

釈尊・龍樹・世親・法然・親鸞らは〈実在人〉です。しかし毘盧遮那仏・阿弥陀仏らは〈抽象仏〉だと私は思います。ヴァイローチャナ(毘盧遮那仏)は『華嚴経・大日経・金剛頂経』で、アミターバ(阿弥陀仏)は『阿弥陀経・無量寿経』などで、「抽象化された」仏たちだと私は考えています。この抽象仏という言葉を使うのは、世界の中で恐らく私が最初です。どういうことかという、これは人間が考えて抽象化したものだと私は考えるのです。ヴァイローチャナは空海によって大日如来と呼ばれるようになりました。分かりやすく言うと、東大寺の大仏・毘盧遮那仏がそれです。これは、『華嚴経』・『大日経』・『金剛経』に説かれています。それから、アミターバは『阿弥陀経』や『無量寿経』などに載っていて、ここで抽象化されました。人間の理想として考え出さ

れたもので、実在仏ではありません。人間の心の中にだけ存在する抽象仏だと思います。

なぜ抽象仏が必要になったのでしょうか。恐らく、龍樹やヴァスバンドゥ(世親)、先ほどの前田先生の話にもあった智顛ちぎんなどによって、毘盧遮那仏は「宇宙と万物の生成の根源」であると考えられました。この世の中ができたことも含め、この世にあって「存在する全ての生成の根源を司った」のがヴァイローチャナだと考えたのだと思います。一方アミターバはアミターユスといわれることもあり、それらは普遍的な空間と時間を意味します。中国語では永遠を意味する無量寿に当たる言葉です。「死後の世界を約束する仏」として抽象化されました。もう一つ、マイトレーヤがあります。日本語では「弥勒菩薩」と訳されています。既に仏教成立の相当初期に、釈迦寂滅の後の56億7000万年後に現れる「未来仏」とし創造されました。これは仏典に書かれています。ですからこれも抽象仏です。

## 私の死生観

ここで「私の死生観」を唱えてみます。宇宙そして地上の動物や植物など全ての生態系の現況が続く限り、この世は唯一の現世です。あの世という世界はありません。これははっきりしています。善導や親鸞が極楽浄土を説いたのも、今のように生き切れば安心して死んでよいとされたからだだと思います。これは私の解釈です。他の仏教者がどのように言っているかとは別です。死ねば宇宙の塵となります。私は自分のことを「宇宙塵(うちゅうじん)」と呼んでいます。宇宙の塵です。宇宙人ではありません。死んで火葬されれば宇宙の塵に戻るので宇宙塵です。次の生命体のDNAがあっても再び命を形成することはあっても、魂が生き残るわけではありません。念仏することで心が安らぎ、



安心して死んでよいと説かれているのだ、と私は考えています。このことで、私と一緒に生活している約1名の女性は、私の考えが「若い時とは違ったのね」と言います。私はこれまでこうした死生観を語ったことは無かったのですが、彼女には私が「魂の不滅」を信じる人と見えていたようなのです。確かに若い頃はプラトンの『ソクラテスの弁明』などにより「魂の不滅」を信じていた節はありますが、こうして80年の生を生きてくるとそれなりに楽しく生きてこられて、安心して死んでもよいと思えるようになったのかもしれませんが。

## 国際華嚴経学会

ここからは現実の話をしします。ちょうど10年前にパリ郊外のベレバで、第2回国際華嚴経学会が開かれました。ベレバは15世紀の素敵な城のある所です。当時どういわけかパリ東方研究所のジラル・フレデリック教授から私に電話があり、「山中先生、華嚴経学会で講演してください」と言われました。私はそのときまで『華嚴経』は読んだことがなかったので、最初の電話では「私は『華嚴経』を読んでいませんから、講演など出来るわけがありません」とはっきり断りました。そうしたらその後すぐにまた電話があって、「説明が遅れたので、先生が断られるのは尤も<sup>もっと</sup>ですが」と言われ、私は「なぜ私ですか?」と訊きました。後で分かったことですが、実は講演を約束していたのは河合隼雄先生でした。けれども3カ月前に河合先生がお亡くなりになって、代わりに講演できるのは誰か、東京大学・京都大学・日文研などに電話をかけて訊いたところ、なぜか私の名前が出たそうです。それで私に電話が来たというわけです。

私は、「正直に言ってくれてありがたいですが、私は『華嚴経』は読んでいけませんので無理

です」と言いました。それが1日目です。ところが世の中は不思議です。私には娘が3人います。長女からその同じ日に電話があり、「パパ、明日、大阪で華嚴経展という展覧会があるけど行く?」というのです。私が「なぜおまえが華嚴経展のことを知っているのか」と聞くと、長女の長男が入った学校が東大寺学園高校とあって、東大寺が設立した学校だったからなのでした。東大寺の宗旨は華嚴宗ですから、明日の華嚴経展に行くようにと全家庭に連絡が回ったわけです。私は「それならば行く」と言って、展覧会は2日間ありましたがすぐ翌日に出掛けました。

出掛けると、そこで私は驚きました。そのときでちょうど50年目ということでしたから、今から60年前になります。東大寺はご承知のように非常に大きな寺です。当時の有名書家100人が『華嚴経』60巻を全て写経し、その60巻の巻頭に60人の有名画家が絵を描き、それらが飾られました。というか何故その時だったかという、書いた書家たちが当然自分たちが書いた経の書を見られるものだとばかり思っていたのに、待てど暮らせど50年間ふつつり展覧会は開かれず、当然ながら50年のうちにどんどんと彼らは亡くなって行くので、とうとう彼らのうちの何人かが怒って早く見たいと要求したのでしょうね。画家たちも、私の好きな東山魁夷・高山辰雄をはじめ、幾多のさまざまな画家の絵がありました。それらは集められただけで、展覧会は一度も開催されたことがなかったので、それが今から10年前ですから、ちょうど50年経ったときに、我々が描いたものはどうなっているのかと描いた人たちが皆、怒ったのです。すでにその半分近くの人たちが死んでいます。死ぬ前に一回でも展覧会で自分が描いたもの・書いたものを見たいという声が出て、展覧会が開催されたそうです。

私は会場で「このデータ60巻全部を見たいの

ですが」と訊きました。「『華嚴経』は漢文で書いてあります」と言われ、「漢文でも構いません。とにかく読みたいので、そのデータを貸して貰えますか」と言うと、「あなたはどの方ですか」と聞かれました。私は、「別に偉そうにするわけではありませんが、たまたま京都大学で教授をしている人間です」と答えると、カタログがあるといわれました。

### 『大方広佛華嚴経』

さて、『アヴァタムサーカ・ストラ(Avatamsaka Sutras)』はサンスクリット語のもともとの名称で、『華嚴経』のことです。私は「深層心理学から見た華嚴宇宙 (Avatamsaka Sutras from the view point of depth psychology)」というタイトルで講演しました。それはちょうどあの日から学会開催の前日まで半年かけて、60巻全部を写経したからです。『アヴァタムサーカ・ストラ』は、中国語では「ホア・イェン・チン」と発音します。正式な訳は『<sup>だいほうこうぶつ</sup>大方広佛華嚴経』です。日本では、それを略して後ろの部分だけをとって『華嚴経』と言っている。これは東晋・<sup>ぶつだぼつたら</sup>仏跋陀羅訳の「六十華嚴」、<sup>じっしやなんだ</sup>実叉難陀訳の「八十華嚴」、般若訳の「四十華嚴」と、3種の訳本がある。私は仏跋陀羅訳の「六十華嚴」を元にしました。それから蔵訳(チベット訳)の、計4巻の「華嚴経」があります。仏跋陀羅は5世紀、今から1500年前の人です。(画像を示しながら)この箱がその六十華嚴が収められた箱です。

これは、60巻全部だとはっきり巻数が見えないので、1巻、11巻、21巻、31巻、41巻、51巻、それぞれの巻物の表面だけを撮った写真です。これは先ほど言った第1巻の東山魁夷が描いた祇園のサクラで、その巻頭になります。

(画像を示しながら)さて、この写真のように書写しました。私はその展覧会を見た翌日

から写経をしました。結局私は全巻を読みました。「それが正解だった」と言ってくれたのは、神戸大学の中井久夫教授です。「それが本当の読み方なのだ」とも。お経は字を読むだけでは駄目で、体に読ませたわけです。これは私の字です。『大方広佛華嚴経』、卷三十六。東晋天竺<sup>ぼつたら</sup>仏跋陀羅の訳の書、尾崎吧鵬先生が書かれたものを写経した巻です、こういうのが全巻あります。

私は、恩師である河合隼雄先生がなぜこの華嚴経学会に招ばれたのか考えました。河合先生の『華嚴経』に関するお仕事で一番有名なのは、『明恵 夢を生きる』という著者です。私はベレバに行く前に<sup>とがの</sup>梅野の高山寺に出掛けました。高山寺の住職が明恵だったからです。(画像を示しながら)これがその高山寺に行く道の写真です。京都駅を出たときは雨が激しく降っていましたが、高山寺に着くと見事に晴れました。そして明恵上人がお住まいになっていた石水院は修復工事中でした。(画像を示しながら)これは私がいつも書いている日記帳の絵です。そこの庭にクチナシがありました。私はクチナシの花が好きです。とてもいい香りがするからです。高山寺を訪ねたのは平成21年7月18日でした。そのすぐ近くに清滝川が流れています。そこで私が作った詩です。

文月雨中訪梅尾 参道緑陰忽然霽  
石水院瞑座縁側 悟事理一即一切

事理一即一切を悟るとは、『華嚴経』の全てを一言で表した言葉の積りです。事も理も全てが同じであって、そこに一切が帰結するという意味です。私はちょうど高山寺を訪ねる頃に、華嚴経全巻を読んで悟ったことを書きました。

私は明恵が20年間にわたって見た夢の全てを一つも残さず日記に書いていたことに驚きました。河合先生はこの日記を読まれてあの本を書

かれたのです。実は河合先生が初めからこれを見つげられたわけではありません。そこへのルートがあります。ノーベル賞物理学者の湯川秀樹先生が、これは素晴らしいので誰か読む人がいないかと探し、哲学者の梅原猛さんに読むように勧めました。梅原さんは「私は読めません。河合隼雄という面白い心理学者がいるから、彼に読ませましょう」と言ったことで、河合先生が読むことになったわけです。河合先生は、驚きをもってそれを全巻読まれました。そこで『明恵 夢を生きる』という本ができました。

(画像を示しながら) さて、これはテレビから撮った河合先生です。私は河合先生に京都大学に召喚されて12年間ご一緒に仕事をしましたから、実はテレビから撮らなくても写真はたくさんあります。これはTVの講演をされていた河合先生の写真です。先生は3カ月前にお亡くなりになりました。

ユング心理学に関しては先ほども前田先生から話がありましたので、ここでもほとんど省きます。(画像を示しながら) これがユングでこれは曼荼羅、ボーリングゲンにあるユングの別荘の中庭にユング自身が彫った石の曼荼羅です。真ん中にホムンクルスがいて、周りにはギリシャ語と占星術記号が描かれています。ユングは『観無量寿経』を読んでいます。ところが傑作なことが起こっています。フロイトもこれを読んでいるのですが、フロイトは前半の「阿闍世王<sup>あじやせ</sup>」の部分だけ、ユングは後半の「十六相観」の部分だけを読んでいます。そしてユングは中国の道教の書「太乙金華宗旨<sup>たいいつ</sup>」要するに、リヒャルト・ヴィルヘルムの“Das Geheimnis der Goldnen Blüte”です。中国における曼荼羅のことです。

それから、アインシュタインをわざわざ挙げたのは、ユングと同じくスイスの大学、いわゆるETHエーテハーに關係ある人物だけ

らです。スイスには実は大学が六つしかありません。バーゼル大学・チューリヒ大学・ローザンヌ大学・ベルン大学・ジュネーブ大学・そしてETHエーテハー、つまり高等工芸大学です。ユングはバーゼル大学卒でチューリヒ大学に勤め、のちにここの教授でした。アインシュタインが卒業したのはこのエーテハーでした。ところがアインシュタインの指導教官はアインシュタインが書いた論文の意味をまるで理解できず、助手にも不採用でした。優秀な学生が出てくれば普通は教授の座をその人に譲って辞めるものですが、アインシュタインはエーテハーから追い出されてしまいました。彼は食べるため仕方なくベルン市の特許庁で働くことにします。しかしそれが正解だったのです。彼の勤める特許庁にはスイスで特許を取得するための申請書類が世界中から送られて来ます。彼は毎日それらを読みました。申請書類には発明の目的、論文の構成、作用、効果がとても分かりやすく示されていました。彼は反省しました。そして分かりやすく書くことにしました。彼はすぐに数式を書き始めて、世の中はこうになっているとわずか10ページで書き上げました。いわゆる「特殊・および、一般相対性理論」です。それをボーアやハイゼンベルクが分かってくれて、アインシュタインは15年後にノーベル賞を貰うことになります。彼は日本にも来ました。

## 「地の出」

(画像を示しながら) これが、先ほどの写真と並んで私の大好きな写真です。これもテレビから撮りました。地面は月です。普通であれば日の出とか月の出とかいわれますが、違います。「地の出」です。地球が月から出てくるので「地の出」です。これは月でないと撮れません。

私が華嚴経学会で最後に出したのは、私が作った箱庭作品です。それを皆に見てもらいました。

## 私が考える華嚴宇宙観

さて、宇宙観です。(画像を示しながら) 私が考える華嚴宇宙観はこのようなものです。これらは全てフランスで講演した内容です。それらを表現した一つの箱庭を作ったのです。

一言でまとめると、このようになります。仏陀は自分自身の存在の原点です。しかし、仏陀が説いたのは色即是空です。実は仏陀自身も存在しているように見えますが、ナノ宇宙から見れば実体は大きすぎて却って何も見えません。空なのです。宮沢賢治の『春と修羅』の冒頭の詩がそうですね。そしてヴァイローチャナとアマターバが左右にあります。ヴァイローチャナは先ほど言ったように抽象仏で、この世の中ができた、生成の根源の代表です。それに対してアマターバは輪廻と救済です。未来にどうなるかを説いたものです。物質の根源はマイクロコスモスであり、宇宙の根源は大宇宙です。中央に須弥山、頂上には私の自己像であるハリネズミが今着いた空飛ぶ円盤に乗っています。鋭い針で周囲を刺しまくります。まわりには海、砂浜に52人の善知識、善財童子が出あったのは53人でしたが、そのうち文殊菩薩は二回姿を変えて出てくるので、実際には52人です。華嚴や唯識がどのようなものかなど、少し分かったかのような説明をしましたが、左は登る太陽としてのヴァイローチャナ(毘盧遮那仏)で、東大寺の大仏です。周囲は赤い花で飾りました。当に昇る太陽だからです。右は沈む太陽、あの世に渡す太陽ですから、青い花にしました。むろんアマターバ(阿弥陀仏)で、鎌倉の大仏です。

(画像を示しながら) 直ぐ手元には死んで生まれてきた子すら救済する地藏菩薩、クシティ

ガルバ(क्षितिधिर्भ, Kṣitigarbha□、対面はエジプトの死者の魂を守る犬アヌビス(Anubis)。その両脇はとうとうと落ちる滝です。これが「私の華嚴宇宙観」です。宇宙は、実はマクロコスモスが、例えば私が小学生の頃から一番愛好しているのは星雲ネビュラM87で、これはNGC4486番です。ここは非常に不思議な宇宙です。エネルギーレベルがとても大きいのです。それから、例のオリオン座の帯の下にあるアンドロメダM31星雲です。我々の銀河宇宙はまた別にあり、そこに太陽系があります。そのソーラーシステムの中の水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星・冥王星が9惑星でしたが、先ごろ国際天文学会は冥王星Plutoを惑星から外してしまいました。私はなぜそれを多数決で決めたのかを問うため、天文学会に手紙を出しました。多数決は、もし100人いて99人が正しいと言っても、1人が間違っているとさえそれがとても大事なことなのです。500年前ガリレオは地球は実は動いていると地動説を提唱して、死刑が決まりました。けれども王はガリレオの言っていることは正しいのではないかと思い、彼を死刑にせずに実はガリレオのために特別な城を造ってそこに住ませました。つまり王はそれが理解できた人でした。私は本当は矮惑星とか何とかいった大きさなどの物理的で平板な理由ではなく、英語名がPlutoで、つまり下界の王・閻魔と地球や金星が同じ範疇にいるのは嫌だとのキリスト者たちの陰謀だとすら思っています。

さて、ここでマイクロコスモスとは原子のことです。原子核には陽子と中間子と中性子があって、核外に電子雲があります。このようなナノコスモスはこの小宇宙からマクロコスモスとしての大宇宙までの全部を包みこんだ宇宙で、これは釈迦が最初に説いていたとおりの構造でした。これで箱庭の説明は終わりです。

## 本学会発表の総まとめ

ここからは本学会発表の総まとめに入ります。私は通常いわれているスピリチュアリティをあまり信用していません。殊更にそのようなことを言い立てたり、そういう仕組みをつくったり、さらには宗教体験がどうのこうのとさまざまな論文が数多く出ていますが、どれを読んでも私はあまり感心しませんでした。むしろ、いわゆる妙好人のような、何も飾らず、殊更言い立てるわけでもなく、ごく自然に南無阿弥陀仏を唱えているのみのときにこそ、私はスピリチュアリティを感じます。(画像を示しながら)これが妙好人の1人です。鈴木大拙くすのききょうらが見つけ出し楠恭ものだねきちべえが書いたもので、この物種吉兵衛というおじさんは堺の人で、19世紀に生まれました。

あるいは、私はヨハン・セバスティアン・バッハやブクステフーデの教会ミサや教会カンタータなどを聴くと、いずれの曲にもむしろヌミノゼを感じます。(画像を示しながら)この写真はドイツの教会で見た荘厳なパイプオルガンです。これは私が持っているレコードのジャケットを示しただけです。また無意識がどうのこうの等というのも私は好みません。スピリチュアリティというのはルドルフ・オットーが言うように、心震える・震撼すべき強烈な体験が必然的に伴うものです。余りにもこの頃は安易にそうしたものを軽々に取り上げすぎで

ます。スピリチュアリティをいうなら、まず我々自身がもっと敬虔でなくてはなりません。ここで私の講演は終わりです。ご清聴ありがとうございました。

## (質疑応答)

**A氏** ヌミノゼとは？

**山中** それは先ほど前田先生が説明していたので、もう重ねなくていいと思いますが、ドイツのマールブルク大学の組織神学教授ルドルフ・オットー (Rudolf Otto, 1869-1937) が説いた『聖なるもの (Das Heilige, Über das Irrationale in der Idea des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen)』がその源泉です。岩波文庫(1968)に訳本があります。井筒俊彦先生の『神秘哲学』(岩波文庫、2019 (1949))や、『意識と本質』(岩波書店、1983)も読んでください。オットーは、ヌミノゼは怖るべき戦慄体験として心震えつつ感じるものではないかと説きました。私はそれに賛成です。そのようなものを感じるときに、まさにスピリチュアリティもあると確かに言えそうです。けれども、この頃スピリチュアリティがどうのこうのとあまりにも表相的に問題にすることが多いので、流石にそのような幽かなものはどこかに遠のいてしまうのです。私は、常々そのように思っています。以上です。ありがとうございました。